

D. H. LAWRENCE の NOSTALGIA

甲 斐 貞 信

“I feel a stranger. I feel a stranger everywhere and nowhere.”

これは、D. H. Lawrence (1885-1930) の 44 年にわたる悲劇的な一生を象徴するといわれる、Savage Pilgrimage の最中、故国の友 C. Carswell へあてた手紙からの引用だ。stranger のくり返しもおかしいが、everywhere and nowhere といった相矛盾する二語のたみかけは、どうしたことか。しかし、このことばの中にこそ、不安と焦燥に駆られながら、一ときも一ところにいたたまらずして、旅から旅に果てた人間 Lawrence の秘密がひそんでいるのではあるまいか。

では、この「もの狂おしき巡歴の旅」は、一体いつから始まりいつで終わっているのか。Lawrence にとつては、ただ長い悪夢でしかなかった第一次世界大戦が終ると、1919年、故国 England を離れてから、妻の Frieda とともに、Italy, Ceylon, Australia, Mexico と、結局世界を東まわりに一周した恰好で、1923年 再び England に上陸するまでの 4 年間、と一応しておかねばならぬ。一応、というのは、喧嘩別れのように妻がさきに帰ってしまったためいやいや帰国したことはしたものの、また再び故国を後にして、流々転々のもの狂おしい旅がついに死ぬまで続いた、とも見られるからだ。しかし、もともとこのことばは、その旅路の果ともいうべき Mexico から “It has been a savage enough pilgrimage these last four years.” (*The Letters of D. H. Lawrence*. ed. by A. Huxley. P. 562 Heinemann 1934. 以下 L. L.) と振り返った 1923 年の彼自身のことばに、その典拠をもつ以上、やはり一応は、1923 年で区切りをつけたがよい。

さて、われわれは、その荒れ狂う Lawrence の実体をつかむために、丁度時間的にも、空間的にもその旅の中間に位する Australia に焦点を合せ、そのときそこで、37 の彼がそれこそもの狂おしく書いたにちがいない手紙数通と、長篇小説 *Kangaroo* (Heinemann 1950. 以下 K.) を主な手がかりに、その跡をたどることにしよう。1922 年の 5 月から 8 月まで、僅か三ヶ月余りの Australia 滞在期こそは、その savage pilgrimage の savage さが頂点に達したのか、お得意の理想社会 “Rananim” の夢もどこへやら、特有の不安動揺が最も烈しく小刻みとなった結果、一切が、さながら台風の目ともいうべき、一種不気味な空白となつて焼きついてくるからだ。

Lawrence の死後、A. Huxley がまるでその死を待っていたかのような異常な熱意を傾けて、序文、索引つき Octavo 版 900 頁の書簡集を出版しているが、それを通読して驚くことは、その優れた序文でも評されたように「極めて筆まめ」に、あれほど独特の生命にみちた「自画像を描いた」Lawrence が、この時期になると、僅か一ケ年に 20 通余りで、実に多いときの四分の一ということだ。それでも、もの狂おしい彼の心の関心をたどる分

には、こと欠かない。まず、当時の手紙の抜書きから、日附順に調べることにしよう。

We are going to Australia — Heaven knows why : because it will be cooler, and the sea is wide..... Don't know what we'll do in Australia — don't care. (L. L. P. 546)

Ceylon から Australia へ向う船の上で書かれた、主語さえ省かれた、文字通り “don't care” の indifference. しかも、相手は、彼の数多い相手のうち最も長く、最も多く、真情あふる手紙を捧げていた前首相令夫人 Lady Cynthia Asquith. まだ着かない前から、すでに前途に絶望しているかのような彼の心の無関心、空虚さ。

One feels like the errant dead, or the as-yet-unborn : a queer feeling.....And there is a queer, pre-primeval ghost over everything. (L. L. P. 547)

心の空虚さは、ついに自らを抹殺し、Australia という自然までも抹殺している。そこは、死後か、出生前か、いずれにしても、もはやこの世でないことは疑いない。

I've got a bitter burning nostalgia for Europe, for Sicily, for old civilisation and for real human understanding..... (L. L. P. 548)

着いてから2週間目。つい、二ヶ月前に逃げてきたばかりのところに対する、この奇怪な、焦げつく NOSTALGIA.

I do wish I had stayed in Western Australia. *Trop tard!* (L. L. P. 548)

東岸に着いたその当日に書かれた手紙らしい。同じ Australia の西から東へ移動しただけで、余りにも早すぎる、このいらだたしい NOSTALGIA.

Often I hate it (=Australia) like poison, then again it fascinates me, and the spell of its indifference gets me. I can't quite explain it : as if one resolved back almost to the plant kingdom, before souls, spirits and minds were grown at all: only quite a live, energetic body with a weird face. (L. L. P. 549)

“indifference” においては、人間と自然との間で、いつか主客が逆になり、受動が能動へ。抹殺されたはずの自然が息を吹きかえすと、不思議な魔力をもつて人間に向い、おそいかかっている。奇怪な変貌だ。もはや、人間としては住むに堪えない、お化けの世界だ。Australia で書かれた最後の手紙。

But still I haven't extricated all of me out of Australia. In one part of myself I came to love it — really love it, Australia. But the restless “questing beast” part of me hikes me out, and here I am. (L. L. P. 551)

Australia から離れ、New Mexico に、着くとすぐ書いたもの。またしても、この不思議な NOSTALGIA. それに対し、いつまでも、どこまでも、彼を駆り立ててやまぬ

“questing beast”. 後向きと前向きと、二つの顔をもつた Lawrence.

この後向きの NOSTALGIA の正体をつかむためには、まず、この前向きの “questing beast” の方から片付けねばならぬ。ただ、ここでは、体は前へ前へと進みながらも、もう一つの顔は常に後向きのままでこの一点にたどりついたこと、即ち二つの正反対の方向にはたらく力によつて、いわば Lawrence が二分され、そこで危く釣合いを保つていたことを指摘するにとどめ、その一点で、恐らく無我夢中で書かれたらしい、恐怖の小説 *K.* をとりあげねばならぬ。

この小説は小説ということさえ憚られる、他のどの小説とも比較できない奇妙な小説だ。R. Aldington は、凡百の Lawrence 伝を集大成すると自負する *Portrait of a Genius, But...* (Heinemann 1950) の中で、「結局、*Sea and Sardinia* 同様の “travel book” である。」(P. 256) と、片付けている。しかし、上掲の手紙の抜書を一覽しても分るように、自然も人間も抹殺してしまつて、どこに “travel book” があろうか。さらに続けて、「“savage pilgrimage” などとは、Lawrence の生涯の象徴としては確かに “a great exaggeration” である。Lawrence が世界中の “rejected guest” となつたのも、非はむしろ彼自身にあつたこと、いうまでもない。」(P. 269) というに至つては、同じ作家仲間 *Carstairs* に対する反感があつたからでもあろうが、誤解も甚しいといわねばならぬ。全く、savage pilgrimage に派生する一切の罪が、一種不可抗力として、Lawrence 自身の側にあつたことは、確かに認められるが、しかし、だからといつて、上述のように見てきた savage さがどうして「誇張」だろうか。むしろ、savage では覆いつくせない、言語に絶した無気味さではなかつたか。

Huxley, Murry, Garnett らとともに、Lawrence の生前から親しく、死後今日に至るまで、数多くの評伝の文章を書いているほどの Aldington であつてさえこれだから、Lawrence という人物自体が、まるで誤解されるためにのみ生れてきたような宿命を背負つていたにしても、いまだに作品 *K.* の謎が、従つてその背後に連なる savage pilgrimage の謎が、依然謎であることに変わりはない。しかし、ここでは *K.* の一つの芸術作品としての解剖は、別として、従来、個人的に最とよく知り合つた人たちがまで見落したとすれば、どうしても Lawrence の生得の肉体そのものに深くひそんでいたとしか思えない、問題の the restless “questing beast” の正体を、この作品の中につきとめねばならぬ。その点、これは、およそ「小説」といつた粹を、それこそその狂おしく突き破つて、彼が当時簡単な心覚えとしてつけていた、しかし未発表の personal diary の延長、とでもいいたい性格の文字を氾濫させ、それによつて、意外に乏しい当時の資料である彼の手紙の代りどころか、往々にして手紙以上に、率直に刻明に自らを語り、比類のない自画像を描いている、と認められるからだ。 “Never trust the artist. Trust the tale.” (*Studies in Classic American Literature*. P. 9 Secker 1933) と、暗に自分で自分のことをいつている彼だ。われわれもまた、何よりも Lawrence 自身のことばに、耳を傾けることとしよう。

...alone by himself, alone with his own soul, alone with his eyes on the darkness which is the dark god of life. Alone like a pythoness on her tripod, like the oracle

alone above the fissure into the unknown.alone in the darkness of the cavern of himself, listening to soundlessness of inflowing fate. (K. P. 316)

“himself” は、この小説の主人公 Richard、即ち作者 Lawrence の分身だ。上の三つの区切りがそのまま、人間として、予言者として、芸術家として、さまざまな誤解を招きながら、ただただ本能にのみ頼つて生きようとし、生きるほかなかつた Lawrence 本来の自画像になつている。所は、世界の果、文明の果、Australia の東南端、地図にも見当らぬ Thirroul, New South Wales. 孤独に追いつめられ、同時に自ら追いつめてゆき、ぎりぎりのところに、息をひそめている Lawrence の姿だ。それにしては、この “alone” のくり返しは、どうしたことだ。さながら、いらだたしい子守唄同様、自分自身を孤独へ、孤独へ、darkness へ、darkness へと追い込もうとしている。彼の孤独と彼の darkness とは、何か暗々裡の、自分でも気付かない、宿命的な結びつきでももっているのではあるまいか。“darkness” 即ち “dark god of life” とは、“unknown” であるばかりか、“fate” でもあると、いつているからだ。全く不思議な “darkness” であり、不思議な “dark god” ではある。

元来、この小説は、奇妙な dark God 論 (cf. Chap. XI. XIII. XVII. etc.) によつて多くの頁がさかれ、その点でよく問題にされる。なるほど、God が大文字になり、小文字になり、単数になり、複数になり、そのはたらきも固有名詞のような、普通名詞のような、時には抽象名詞のような、全く主人公の作者その人を思わせる、とらえ所のない怪物振りだ。しかし、それが “the great life-urge which we call God” (P. 331) とか、上掲の “the dark god of life” とがいつた表現によつても分るように、ともかくも、旺盛に生きようとする生への衝動、即ち原始的な生命本能の神格化、であることにまちがいはない。これは、一見 *life force*, *élan vital*, *will-to-live* といったことばを連想させるが、実は、それらとは根本的に相違する点をもつことに注意せねばならぬ。それは、元来彼の論が、論は論でも彼自身の、それこそ身を切られるような体験を打ちまけて、その結果出てきた “pseudo-philosophy” (cf. *Fantasia of the Unconscious*, Foreword P. 10 Secker 1923) だけに、決して哲学的な抽象論ではないことだ。従つて、彼の dark God 論も、あくまでも彼の意識せずして描いた自画像、その裏付けとしての体験、として見てゆかなくてはならぬ。

このような見地から、大文字の dark God の方は、Lawrence が後に死の宣告を受けながら書いた最後の傑作 *The Man Who Died* (1928) において、ついに隣人愛も恋愛も含めた一切の過去の愛の神 white gods (cf. K. P. 300) の代表と目される基督と対決するまでに立ち至つた、いわば一種悲壮な自画像的性格をもつた God だ。これに対し、小文字の dark god の方は、人間 Lawrence の肉体の内部にひそむ本能的な life-urge の神格化に外ならず、それが彼にあつては、同時に予言者、芸術家としての inspiration の源でもあることは明らかだ。とすれば、この life-urge の dark godこそは、当時の彼を駆つて焦燥の旅から旅へと追いやつた “questing beast” となるのではあるまいか。ただ、それにしては、god をもつて beast とは、余りにおかしくなる。

Chap. VIII *Volcanic Evidence* の “Earthquakes” という、異様な挿入のその直前、これもまた異様な、さながら自ら心の中の底知れぬ深淵をのぞき込んで、われながら慄然とし

た、といった体験の記録がある。原稿用紙を前に、一心に彼の dark god の住み家 “uncounselous” を “tap” しているとき、自動車のとまる音がして、ふと目をあげる。二人の見知らぬ女の後姿が見える。すると、“devil came and sat black and naked in his eyes……. lashed its tail until he writhed” (P. 182) という。これは、恐らくは、Bible の *St Matthew*, V, 28 のことを指しているのでもあろうか。こうして、きびしい自問自答が始まる。“Is this devil after all my god? Do I stand with the debbil-debbil worshippers, in spite of all my efforts and protestations?” と。それがついに “I can't help it : it is so, then let it be so.” で、彼独特の結論となつている。一旦 Yes といい、最後にはやはり No といったのだ。こうして、一度とび出した dark devil も、ついには dark God の腹中におさまつて再び神格化され、Lawrence は、結局もとの本能の人 Lawrence になつた。なるほど彼自身としては未曾有のことだ、これをもつて自己との対決 (cf. P. 182) と見なしたのも無理はない。内部の darkness をもつて一度は、god ではない devil だ、とまで見た、ともかくもそこまで追いつめられ、そこまで追いつめていつた Lawrence の当時の異常さだけは、認めてやらねばなるまい。しかし、darkness を devil として見ていたはずの “I” そのものの存在は無視して、最後には、darkness との関係を “I can't help it…” をもつて “fate” とし、自身、God の仮面にかくれたところからすれば、所詮 Lawrence は、宿命的に自己と対決し得ない人間だつた、と見るほかはない。同時に、それほどにも Lawrence の目には恐ろしい darkness だつたことも、否定できまい。

もはや、“questing beast” の正体は明瞭だ。やはり dark devil でもある dark god、即ち Lawrence の肉体の内部深くひそむ darkness だつた。ただ、彼自身は、それを “life-urge” といった前向きのもんとしては、はつきり認めていたにかかわらず、何故か神のように恐れて、目を向けようとはしないのだ。ぎりぎりの点まで追いつめられ、追いつめながらも、ついに対決し得なかつたほどの、彼にとつては恐るべき darkness だつた。

では、このすでに明瞭な “questing beast” に対し、それと釣合いを保ちながら反対の方向にはたらく力としての、あの前に見た奇怪な NOSTALGIA は、一体どこに求めらるべきか。当然、彼の内部にあつて無意識のはたらきをなす darkness 以外にあり得ぬ。そして前向きの力としての darkness を “life-urge” と名付けたからには、NOSTALGIA という後向きの力としての darkness には “death-urge” と名付けていいはずだ。ただ、Lawrence 自身、後へ後へと引かれる強い力は身を感じながらも、それに対しては、何故か頭から認めようとはしなかつただけだ。darkness そのものを恐れたのも、このためにちがいない。これで、すでに彼の手紙によつてわれわれの知つたあの前向きと後向きと二つの顔をもつた Lawrence の実体は、実に前向きと後向きと二つの顔をもつた darkness にあつたことを突きとめたわけだ。では、何故彼は、それほどまでに、後向きの darkness、即ち “death-urge” の方を恐れて、認めようとはしなかつたのだろうか。何か、その向側に、恐ろしいものが存在していたのではあるまいか。勿論、“death-urge” といったことばそれ自身には大いに警戒を要する。何故なら、Lawrence にあつては、life と death といった概念的な対立などはありません。あくまでも事実として、体験として裏付けてゆかぬ以上、単なる空論に墮してしまふ危険が伏在するからだ。幸なことに、彼自身の体験としての、恐るべき darkness

が書簡集の初めの方に報告されている。

まだ無名の文学青年だった 26 の Lawrence が、故郷の町のとある *café* でお茶をのんでいた。相手は、一人の名もない女。その時突然、おそわれたのだ。

It's awfully funny. I had a sort of cloud over my mind — a real sensation of darkness which lifted and trembled slightly. I seemed to be a sort of impersonal creature, without heart or liver, staring out of a black cloud. It's an awfully funny phenomenon. (L. L. P. 25—6)

“a real sensation”だから、理論ではない。われながら説明のつかぬ、しかし恐ろしい体験だったのだ。ここの“funny”は、当然 context からみて“hard to account for” (COD) の意味であり、くり返される“awfully funny”も、そのまま god unknown 即ち dark god となつてくる。とすれば、問題の dark god も、案外こういつた恐るべき体験としての darkness から、派生したのではあるまいか。いずれにせよ、それに包まれると、人間が人間でなくなるという以上、もはや人間の彼方にある異常な体験にはちがいない。

次に、われわれの知り得る事実としての darkness の、その例証としては、彼の愛用語、むしろ濫用語とでもいいたいいらだたしさで、作品の各所でくり返されるあの特有の dark, darkness を指摘するだけで十分だろう。時には一つの sentence に二つも三つも使つてあつて、これでもか、これでもかとそれをたたきつける、かと思うと一寸の抵抗にもすぐその中に逃げ込む、そんな印象を与える不思議な darkness だ。全く、Lawrence の文学自体が、darkness の文学ではないか。いいたいくなるのだ。

さて、ここで一応 darkness 追求の手をゆるめ、NOSTALGIA の別の手がかりとして、それが触発される最初の瞬間とも見られる別離の場面場面を中心に拾い出し、Lawrence がそれをどう感じたか、後を振り返りながら何をどう眺めたか、作品 K. の中に解答を求めよう。何と、ここにもまた、同じような darkness の体験が語られているのだ。

He felt a deep pang in his heart, leaving Australia..... He felt another heart-string going to break like the streamers, leaving Australia, leaving his own British connection. The darkness that comes over the heart at the moment of departure darkens the eyes too, and the last scene is remote, remote, detached inside a darkness. (K. P. 400)

これは、New Mexico に着いてから書き加えられた最後の chapter, *Adieu Australia* の結末のところだ。別離の情に誘い出された不思議な darkness の体験が、それも超時間的 tense で述べられているが、前の“real sensation of darkness”と比較して、何とよく似た現象だろう。Lawrence がそこに包まれている。しかし、これによつても、体験としての彼の darkness が、やはり後向きでもあつたらしい、という一つの具体例になることはまちがいない。

次に、問題は、ここに出てきた“streamers”だ。それは、よく船の出でゆくとき見送り人の間で使われている“rolls of coloured paper ribbon” (P. 400) には相違ないが、ここ

では彼の “heart-string” の象徴となり、ついに “The last streamers blowing away, like broken attachments, broken heart-string.” (P. 401) となるまでの哀切さで、二頁にわたつてくり返されることばとなつている。しかも、それが Australia との別離以外に、また、“his own British connection” との別離として感じられたというのだ。一種の異常にはちがいないが、この二重になつた “heart-string”こそは、彼のあのもの狂おしい旅の別離という別離に、常に感じられ、あるいは、それが二重の NOSTALGIA となつて独特の焦燥となつたのではあるまいか。

Aldington は、この “his own British connection” をもつて、Australia が “the great Empire” (P. 401) のうちだから、といったほんの表面的な意味にだけとつているようだが (cf. *Portrait of a Genius, But* P. 256), そのような解釈が如何に無意味なものであるかは、前に見てきた Lawrence の手紙でもわかるように、Australia の方は初めから Lawrence によつて抹殺され、ついにはその国自体が一種の “Tabula rasa” (P. 372) として、彼の自画像用の画布とされ、彼自身滞在中全く人間世界に背を向けていた (cf. P. 15), といった事情から考えても明瞭だ。恐らくは見送り人など一人として無かつたかも知れないのだ。従つてここでは、Australia よりも “his own British connection” の方にこそ重点がおかれなくてはならぬこと、いうまでもない。

今度は、同じ作品の初めの方に目を移してみる。例の手紙にあつた、Australia 上陸当時の “a bitter burning nostalgia” が、これも実に二頁にわたつても狂おしく書かれているが、その中では、heart-string が navel string という如何にも Lawrence 好みの表現となつてすることに注意される。たしかに、navel の方が heart よりはおもつと体の下の方にあり、彼の生命中枢、いわゆる臍下丹田の “solar plexus” (cf. *Psychoanalysis and the Unconscious*, Seltzer 1921 etc.) に接近し、いやむしろ直結しているからだ。

He felt a long navel string fastening him to Europe, and he wanted to go back, to go home. (K. P. 16)

それにしても、この文の最後にもつてこられた “home” というのは、一体、どこを指すのだろうか。NOSTALGIA の対象として、当然 home が問題とされねばならぬからだ。もしも、文字通りに Europe がそれだ、とするならば、“.....he wished that every mail-boat would go down that was bringing any letter to him, that a flood would rise and cover Europe entirely, that he could have a little operation performed that would remove from him for ever his memory of Europe and everything in it” (K. P. 168) といった強く引かれるだけにいよいよ憎む、この激しい反撥、憎悪はどう説明したらよからうか。では、やはり生国の England だけを指そうとするのだろうか。とすれば、“He felt he would have given anything on earth to be in England.....end of May—almost bluebell time.....” (P. 15) といった激しい NOSTALGIA で、一応は前の “his own British connection” と一致することはする。ところが、不思議なことに、その時の彼の目は、必ずしも England のみに向わず、何かしら一点に焦点を定めかねるといつたものかしさで、Florence, Sicily, Bavaria, Alps と (cf. P. 15), かつて足跡を印した Europe 全

士の思い出の地をと転々して、何故か England から目を逸らそうとしているのだ。

その不思議な彼の視線を追つて、今度は海を渡つてずつと近寄り、England と彼との別離の場面を見なくてはならぬ。有難いことに、Lawrence はこの作品の真中に、*The Nightmare* と称する chapter を他の二倍乃至三倍の長さをもつて、文字通り「夢魔」の如く割り込ませ、1914 年から 1919 年まで、主として第一次世界大戦下の England における、彼の悪夢の思い出を吐き出しているが、その結末近くだ。

And as he looked back from the boatEngland looked like a grey, dreary grey coffin sinking in the sea behind, with her dead grey cliffs and the white, worn-out cloth of snow above. (K. P. 290)

この奇怪な England の変貌は、一体どう説明したらよいのか。しかも、“Left England, England which he had loved so bitterly, bitterly—and now was leaving, alone, and with a feeling of expressionlessness in his soul.” にすぐ続いての、この England の奇怪な変貌は。

ここで、われわれは一応、彼の「表現を絶」せしむるに至つた「悪夢」の中味を覗き込まねばならぬ。妻が、たまたま敵の独乙人なるが故に、彼ら夫妻を迫害し、追放し、しかも国外には一步として出ることを許さず、米国行きの旅券さえ取上げた祖国 England。これに対しては、檻に閉ち込められた山猫 (L. L. P. 433) となつて、Lawrence は呪い狂うのだ。愛国心や democracy の美名にかくれ、戦争を排発するものは、敵も味方もない、人間の心の中に巣喰う集団根性だ、おれはもはや英国人ではない、甘んじて人類の敵にもなる (L. L. P. 365) と。従つて、一旦 “rooted for ever” (P. 275) と思われた彼の最初の Utopia たる Cornwall の海岸から、敵の spy という根も葉もない嫌疑で国家の名によつて追い立てられたその瞬間から、すでに “homeless and landless, just move about” (L. L. P. 434) といつた彼の England 内での savage pilgrimage は、始まつていたと見なくてはならぬ。それは、長い悪夢だつたにちがいない。呪わしい、憎むべき England だつたにちがいない。にもかかわらず、終戦となり悪夢はすでにさめたはずなのに、何故か Lawrence は丸一年も England を発ち渡つており、それが、いよいよ船が England を離れて振り返つて見た、この奇怪な England の変貌だ。

Lawrence は、これと同じような表現を絶した、生身を裂かれる恐怖を、やはり同じ作品に出る、作者のも一つの分身でもある、人物 Kangaroo の奇怪な変貌として描き、“He (=Richard) stood up in a kind of horror, in front of the great, close-eyed, horrible thing that was now Kangaroo. Yes, a thing, not a whole man. A great Thing, a horror.” (P. 236) といつている。事実 Lawrence にとつては、その恐怖とこの恐怖とが全く “same terror” (P. 290) だつたことは、この *The Nightmare* の chapter をすぐ次の頁に続けて割り込ませていることからみても、明らかなことだ。従つて、Lawrence によつて殺される分身 Kangaroo は、実にここでは Lawrence によつて殺される準分身 England となり、こうして、愛しながらも殺さざるを得なかつた、最も愛する一心同体の死体が、今、雪の経かた

びらを着て、海の彼方に沈んでゆくのだ。だからこそ、同じ England との別離の体験を述べた同期の作品 *The Lost Girl* (1920) で、はつきり “watched it, fascinated and terrified” (ibid. P. 328 Boni 1930) といっているように、彼の home は、彼をひきつけながらも化石させる恐怖の魔力をもつて Medusa に変貌し、彼の視線を逸らせるのだ。

さて、ここまできて、England の奇怪な変貌の謎がこれで解けた、England を熱愛しながらも捨てざるを得なかつた *déraciné* たる Lawrence の NOSTALGIA の秘密もこれで明らかになつた、と簡単に愛国心で片付けていいだろうか。なるほど、常識的には、一応それで辻つまの合うところから従来は、Huxley でさえ “England in the teeth of all the world, even in the teeth of England.” (*L. L. P. XXVI & P. 546*) といつた Lawrence のことばを引用して愛国心を出発点と考え、それで満足しているらしく見える。しかし、如何に England を愛していたにしても、如何に心にもなく England を振りすてたにしても、Lawrence のそれは、愛国心というには余りにも異常な愛の表現方法ではあるまいか。現に、この愛国心的挿入であるはずの *The Nightmare* の結末においてもすでに愛国心説は破綻を示している、とは見られないだろうか。

He felt broken off from the England he had belonged to. The ties were gone.
.....He was broken apart, apart he would remain. (P. 291)

この回想の切れ目において、“his own British connection” も、一応切れたことになつてはいるが、その実切れるどころか、すでに Australia で見てきたように “a long navel string” となつて、つながっていたことは、いうまでもない。England の亡霊は、殺しても殺しても Lawrence を追いかけて、離さなかつたのだ。ところが、問題は、彼の navel string が “ties” と複数になつていることだ。もし England だけのつながりならば、当然単数にしたらどう。そういえばたしか、同じく navel string を象徴していた “streamers” も複数で、しかもその端は二人の夢の女が握つていたはずだ (P. 400)。

ついに England まで達したわれわれは、この目も鼻もない夢の女たちに手がかりを求め、彼の “long navel string” をたぐりつつ、その home を England の向側までたずねてゆかねばならぬ。とすれば、これからさきの論理も超論理に、飛躍させねばならぬ。何故なら、彼自身どうしても見きわめようとはしなかつた、彼の無意識の底の恐い darkness を、今手さぐりする必要にせまられたからだ。

今度は、詩を援用する。丁度 savage pilgrimage の頃、1920 年から 1923 年までの四ケ年に書かれた唯一の詩集 *Birds, Beasts and Flowers* (1923) に出ている *Ghosts* の一篇 *Spirits Summoned West* と題する詩の冒頭だ。

England seems full of graves to me,
Full of graves.

Women I loved and cherished, like my mother;
Yet I had to tell them to die. (*The Collected Poems. P. 523 Secker 1932*)

この最後の不思議な一行については、Murry がその劃期的な Lawrence 伝 *Son of Woman*

(J. Cape 1923) の P. 246 において「女達に対し、到底生きているままでは愛し得なかつたが故に、死ねといつたのである」と解釈している。Lawrence の肖像としての同書自体には、Huxley 同様必ずしも賛成できないが、この一行の解釈については尊重されていい。しかし、われわれの当面の問題は、“England” と “women” だ。Lawrence の home であつた単数 “England” を、同じく彼の home ともいえる “my mother” を媒介とすることによつて、彼が愛するが故に殺さねばならなかつた複数 “women” と、一つに結びつけることができるか、どうか。ただし、彼の “mother” と彼の愛する “women” との関連性については、例えば作品 K. の中にも面白い資料がある。むしろ、こちらの方が上の詩の原典といえるかもしれぬ。それは、当時彼がくり返し見た愛する女の悪夢の記録だ。

.....his dreams of a woman, a woman he loved, something like Harriet (=his wife), something like his mother, and yet unlike either.....And the woman in the dream was so awfully his mother, risen from the dead, and at the same time Harriet, as it were departing from this life, that he stared at the night-paleness between the window curtains in horror. “They neither of them believed in me”, he said to himself. Still in the spell of the dream, he put it in the past tense, though Harriet lay sleeping in the next bed. He could not get over it. (P. 103—4)

愛しようにもついに愛し得ぬ、現実における最愛の妻を、生きたまま夢うつつのうちに抹殺しようとする当時の Lawrence の、如何にもそれらしい無気味な、無意識の心理がそのまま、われわれまでをわけも分らずに、恐怖の中へとひきずり込む。たしか England には、彼の愛した女が母以外にも、何人かいたことは事実だ。それが皆、彼にとりついている母の image と重なつて次々に殺され、彼の home は “coffin” となり、“full of graves” となつたのだ。これで、彼の愛した、そして愛する女は、母一人の単数でありながら、同時に母何人かの複数だつた、ということは即ち彼の “navel string” が母につながる単数でありながら、同時に妻やその他の多くの愛の対象にもつながる複数 “ties” でもあり得た、といえないだろうか。

さらに、上文でも見られるように、夢の女が “like his mother” からいきなり “his mother” となつているが、この like (adj.) の省略、即ち外面的な simile から内面的な metaphor へといつた当時の彼の文体的傾向は、例えば “To be clear of love.....To cut himself finally clear from the last encircling arm of the octopus humanity” (P. 298) といい、その humanity の love の化身 Kangaroo に対しても、“He (=Kangaroo) wouldn't be hugging me if I were a scorpion. And I *am* a scorpion.” (P. 234) と、彼自身も忽ちにして “a scorpion” に、果ては彼の紋章にまでなつた “the one and only phoenix in the desert of the world” (P. 196) に変貌変身してしまうのと軌を一にして、とりも直さず、当時の彼のものの見方が、人間も自然もない、媒介物を越えて一挙に現象の彼方にある生命の核心をつき、それと直結して、主客一体となつた生命の交流がより自由になつたことを意味し、それだけにまた彼の当時のことばは、背後にかくされていた本来の意味が表面化してより素直に出てきたもの、と解釈していいのではあるまいか。何しろ元来が一切の

作為を排し、どこまでも内心の声に忠実であろうとする彼のことだ。その“navel string”も、この場合普通の figurative の意味からもつと literal の方へ近ずけて、彼の意識の底を推しはかつたとしても、果して無理な飛躍だろうか。

その証拠固めに、三通の手紙をとりあげねばならぬ。最初の一通は、Murry の妻だった K. Mansfield あてのもの。

.....this mother-incest idea.....seems to me there is this much truth in it : that at certain periods the man has a desire and a tendency to return unto the woman, make her his goal and end, find his justification in her. In this way he casts himself as it were into her womb, and she, the Magna Mater, receives him with gratification. (L. L. P. 458)

ここでは、何とはつきり“into her womb”といつて、文字通り“navel string”のつながる home を指示しているではないか。それでは、その home をもつ女は、誰のことか。“the man”の方は、Lawrence や Murry を含めて一般男性を指したものにちがいないとして、“the woman”の方は、何と“the Magna Mater”といっているのだ。実に、「大いなる母」とは、母以外の愛する女性は何論、人間から、自然から、その数の如何を問わず一切を包含できることとなり、そのまま Lawrence の人間や芸術を知る上に、貴重なかぎともなるからだ。そこで面白いのは、この四年後、彼女の死を聞いたとき、今度は Murry にあてて“I always knew a bond in my heart. Feel a fear where the bond is broken now” (L. L. P. 562) と彼は自分と彼女との間をつないでいた navel string を“bond”に代えて、哀悼の意を表していることだ。彼女もまた、彼の Magna Mater の一人だったのだ。

次は、savage pilgrimage の最後、帰国を一日のぼしにのぼしながらも、ついに現実の孤独に堪えられなくなり、逃げた妻の後を追つて死んだ母の国 England へ出発せざるを得なくなつた、その直前の手紙だ。表面、Murry にあてながら、実は無意識に自分自身にいつてきかしているのだ。

England is only one end of the broken rope.....There's another. There's another end to the outreach. One hand in space is not enough. It needs the other hand from the opposite end of space, to clasp and form the bridge. The dark hand and the white. (L. L. P. 582)

彼の navel string がここでは“rope”に変つている。そして England の向側から、home でない home から、darkness が無気味な手をさしのべている。それは、England という墓場の darkness であるとともに、彼の母の胎内の darkness ではあるまいか。そしてここで彼は、その切れた臍の緒の“the rope”を“the bridge”にかけかえようとしているのではあるまいか。

第三の証拠は、Freud 一派に対し批判的立場を主張する Dr. T. Burrow に共鳴しながら、42 の Lawrence が、われながらついに正体のつかめぬ執拗な苦悩を訴えた手紙の一節だ。

I believe.....that it is our being cut off that is our ailment, and out of this ailment everything bad arises.Myself, I suffer badly from being so cut off.
(L. L. P. 687)

例の書簡集序文によつて見事な Lawrence 像を描いた Huxley は、さすがに彼の *savage pilgrimage* の謎についても異常な関心を示し、その原因を、ここにある Lawrence 自身のことばをとり、折角 “the sense of being cut off” (L. L. P. XXVI) だ、と断定を下したにもかかわらず、ついに、現実社会からの逃避と理想社会への探求との同時性、などという妙な仮説のもとに、問題の NOSTALGIA の由来については、振りすてた社会に対する “responsibility” (P. XXVII) などと、苦しい説明をつけざるを得なかつた。Lawrence—流の、“Rananim” といったような背後にある理想世界の投影、に目をとられた結果、“being cut off” を普通の separation と考え、これを臍の緒の断絶感とは解き得なかつたのだ。Huxley が、いわれる God’s-eye view によつて全面的真理を標榜しながらも、ものの内面の彼方にあるものに対しては、初めから信じることができなかつた、そこに、伝統の科学的懐疑主義 agnosticism に崇られた彼の、少くとも Lawrence に対しての、悲劇的限界があつた、と認めざるを得ぬ。

以上のように見てくるとき、Lawrence のいう “navel string” とは、それを逆にたどつてゆくことによつて England を通り越し、ついには母の “womb” へ直結するものとなり、従つて彼の NOSTALGIA の向う “home” も、彼の母の拡大された “Magna Mater” として象徴の関係にある England という国でもありながら、その実その彼方にある死んだ母の胎内だつたことは、もはや疑問の余地がない。彼自身 dark god として認めたあの生へ向つた前向きの darkness は、彼の意識の底においては、またその逆にはたらいで死へ向つた後向きの darkness でもあるという両極性をもち、それが常に目に見えぬ臍の緒によつて母の胎内の darkness につながり、そこに彼の意識せぬ究極の home があつた、としなければならぬ。あの、ともすれば全身を包んでしまおうとする darkness の、恐ろしい、超現実的な体験も、あるいは母の胎内における出生前のその再体験ではなかつたろうか。いずれにせよ、そのような home であつてみれば、Lawrence がそれに引かれながらも反撥し、目を逸らしたのも当然だつた。それは、実に彼にとつては、死を意味したからだ。にもかかわらず、切られていながら切れていない、切つても切れない臍の緒の、いらだたしい断絶感、連続感の交錯に悩まされ、そこに彼の NOSTALGIA の謎の正体があつた、とすれば、その臍の緒の切られた現実の体験、即ち彼の出生そのものに、何か異常の介在したことは疑い得ない。

Lawrence の自伝的小説 *Sons and Lovers* (Heinemann 1913) によつてわれわれの知り得ることは、その題名の示すように、母の息子が即ち母の恋人であるという、さながら人間 sex の宿命的三角関係 Oedipus Complex というよりは、むしろその一角を欠いた Mother-Son Complex の典型的な犠牲とされ、同時に自ら犠牲となつて十字架にかかつた Lawrence 自身の異常さだ。しかし、われわれとしては、それを単に先天の素質としてではなく、むしろ彼の出生事情の特殊性として見てゆくのが至当であらう。

現代英国の末期的資本主義経済機構の基盤を支える、貧しい、しかし頑健な炭鉱労働者を父とし、その一階級上の特有な伝統をもつ中産階級から転落してきた、ひ弱い、しかし、一徹な精神的 puritan を母として、この危機に立つ20世紀に、Lawrence が生れてきたという事実だ。父の肉体的本能的なものと、母のそれを否定し抑圧せんとするものと、そのような相反する二つの結びつきが、やがては分裂すべき二にして一なる異常の種子として、日の目を見ない彼の個体の初まりにすでに蒔かれていた、と見るべきではないか。O. Rank (1889—1937) の、人間の出生それ自体が精神的傷痕をのこす経験である、とする出生傷痕説が、果してどの程度まで普遍性をもち得るかは、一応疑問がもたれるとしても、少くとも Lawrence の出生自体がこの世の招かれざる客だつたことを彼が身をもつて感じ、それが精神的傷痕を残した 事実 は 否定できぬ。母と息子との間で「臍の緒が切れていない」(cf. Chap. II *The Birth of Paul*.....P. 45) と感じたのは、母であるとともに、息子即ち Lawrence 自身といわざるを得ぬからだ。事実、母の Lydia の死後、第二の母たる妻の Frieda、第三の母たる世の一切の女人に対しても、また最大の Magna Mater たる世界そのものに対しても、終生この臍の緒の切れて切れない NOSTALGIA の焦燥感に悩まされ、たまたま彼が生きた 20 世紀の風が冷たく当れば当るほど、Lawrence は、その秘かな涅槃の夢を、森羅万象一切の母なるものの胎内に見続け、描き続けたのだ。

たしかに Lawrence の出生事情には、異常があつた。しかし、彼はその運命の致命傷に対して、身をもつて抵抗し、その異常を単なる異常として終らしめなかつた。生と死と、二つながらに激烈な背反する衝動に引き裂かれつつ、その惨めな肉体を張つて日々「復活」し、その宿命の darkness をも独特の宇宙的 darkness に切りかえて自らを包み包み、あの芸術以前の芸術というべき無類の魅力をもつ芸術たらしめたのだ。およそ人間としては、如何ともすべからざる不運な出生によつて、現実の孤独地獄をさまよいながらも、何とかして断ち切られた臍の緒をつながんものと、絶えず切ない「愛」の手を人間にのぼし、自然にのぼし、それとともに、母の胎内の世界へのいらだたしい NOSTALGIA を逆にそのまま、悪夢の 20 世紀の世界一杯にひろげながら、相隔たるその二つの世界に象徴の「虹」をかけて、与えられた生をあくまでも生きてゆこうとしたのだ。

これが、Lawrence という宿命的な stranger の一生、*déraciné* であつて、しかも *enraciné* たらんとした人間の「もの狂おしき巡歴の旅」の秘密だつた。

“I feel a stranger. I feel a stranger everywhere and nowhere.”